

ならまち民話地図



1 蓮長寺の龍



蓮長寺の内陣の天井に、狩野元俊が描いたといわれる大きな龍の絵があるねん。
むかし、この龍が、夜になると寺から抜け出して、付近の田畑を荒らしたそうや。それで、蓮長寺のお坊さんが、龍の目と鱗を三枚、墨で塗りつぶしてしもうた。すると、龍は、もう天井から抜け出すことができんようになって。この龍の絵は、円で囲んであるけど、それは、ある霊能者が、龍と対決したとき、龍の霊力を封じ込めるために書き加えたものやねんて。

2 「東向き」の由来



近鉄奈良駅から南都銀行本店までを「東向」というねん。自治会が二組に分かれて、近鉄駅寄りが中町、南都銀行寄りが南町や。それを一つにして、東向商店街というメインの商店街になったんや。
なんで「東向」というのかというと、明治の中頃、家が東向いてしか建ってなかったんやて。通りの西側に家が建ってて、みな東向いてたんや。東側は興福寺の土塀やってんて。

3 采女神社の由来



猿沢池の東の岸には衣掛柳いう柳の木があつて、西の岸には采女神社がある。采女神社のお社は、池に背中を向けて西向きに立ち、後ろの池側に鳥居がある。日本中で、後ろに鳥居のある神社は、ここだけやねんて。
むかし、奈良の帝に仕えてた采女があつた。えらい美人やった。あるとき、采女は帝の目にとまって、お側に召されたんや。ところが、一度きりで、二度と召されることがなかったそうや。采女は世をはかなんで、猿沢の池に身を投げて死んでしもうた。その時、脱いだ衣を掛けた柳が、衣掛柳や。
その後、采女を祀って、采女神社が建てられてん。池に向つてお社を建てたけど、みずから命を落とした猿沢の池を見るのが恨めしいからか、一夜のうちにクルリと後ろを向いてしもうたそうや。

4 「餅飯殿」の由来



役行者が大峰山を開山して二百年くらいたった頃のことや。大峰山中の阿古滝に、大蛇が棲んでて、修行にくる人らに悪さしたんやて。それで、登ってくる人がほとんどなくなつて、霊場はさびれてしもうた。
この時、大峰山中興の祖、理源大師が、「大蛇を退治せよ」という勅命を受けてん。理源大師は、奈良に住んでた大峰山の先達箱屋堤兵衛を呼んで、助けてもらうことにした。堤兵衛は、えらい力持ちで勇氣もあつて、大法螺貝を吹き鳴らすことができてん。
二人は大蛇をおびきだして、理源大師が法力で大蛇を呪縛し、堤兵衛が刃でまっふたつにしてんて。それで、大峰山霊場はにぎわいを取り戻すことができたんや。
箱屋堤兵衛は、奈良から理源大師を訪ねるとき、いつも理源大師の大好きな餅飯をお土産に持って行ったんやて。それで理源大師は、堤兵衛を餅飯殿と呼んでん。餅飯殿が住んだ所やから、餅飯殿と呼ぶようになってんて。

6 不審辻の鬼



御所馬場町とカササギ町の間の東西の狭い横町をフリガンスシ、不審ヶ辻というねん。
むかし、御所馬場町に松浦という長者があつた。ある夜、長者の家に盗賊が忍び込んでん。それを長者が捕まえて、鬼隠山から谷底へ投げ込んで殺してしもうた。そしたら、死んだ盗賊の霊が鬼になって、毎晩、元興寺の鐘楼に現われて、町の人らを襲うようになってんて。
後の元興寺の法師道場上人は、そのときまだ小僧やつたが、ある晩のこと、「私が鬼を退治します。」というて、鐘楼の陰にかくれて鬼を待ってたんやて。真夜中、鬼が現れた。小僧は、鬼に飛びかかっていった。小僧と鬼は激しく戦うてたが、朝方になると鬼は逃げだした。小僧は追っかけたが、今の不審ヶ辻の所までくると、鬼の姿はぼつと消えてなくなつた。あたりはがさつぱらで、なんぼ探しても見つからへんかったんやて。
こんなことから、誰いうとなく、この辻を不審が辻、フリガンスシと呼ぶようになったんやて。この元興寺の鐘楼は、今は、新薬師寺に移されてて、鐘には鬼の爪あとがいつぱい残つてるといふことや。

7 十三鐘の石子詰め



昔から、奈良の鹿は、神様のお使いやいうて、大切にされてきてんて。春日神社の神様が奈良に来るとき、鹿に乗ってきたんやて。そんな尊い鹿を殺したら、「石子詰め」の刑というて、死んだ鹿と一緒に生きたまま穴に埋められたそうや。
菩提院大御堂は、俗に十三鐘と呼ばれてる。むかし、このお堂の横に寺子屋があつてん。あるとき、三作いう子が、この寺小屋で、「いろは、いろは」といいながら習字していると、鹿が上がってきて、廊下に置いてあつた大事なお手本を食べ始めた。三作はびっくりして、「こらっ」というて、思わず、手元にあつた文鎮を鹿に投げつけたんや。そしたら、鹿は倒れて死んでしもうたんや。鹿を殺した三作は石子詰めにされることになつてん。大御堂の前の庭の東の方に穴が掘られ、三作は鹿と一緒に生き埋めにされてしもうたんや。
三作の母親は、三作が埋められた所に紅葉の木を植えて供養した。その時から、「鹿に紅葉」という取り合わせが始まったそうや。そして、三作が石子詰めになった時刻が、夕方六つと七つの間やつたので、六つと七つを足して、十三鐘いうようになったんやて。

9 良弁杉



むかし、近江の国滋賀の里に、信心深い夫婦が住んでたんやて。ふたりが、観音様に「どうか、子どもをお授けください」というて、毎日毎晩お祈りをしてたら、玉のような男の子が生まれてん。母親は、片時も離さんと、大事に育ててんて。
子どもが二歳になった時、母親は子どもをつれて畑に桑の葉をつみに行ってん。一生懸命働いてると、不意に大きな鷲が飛んで来て、子どもをつかんで飛び去つてんて。鷲は子どもをつかんだまま、南へ南へと飛んで行ってしもた。
鷲は、奈良の東大寺まで来ると、二月堂の舞台の下の杉の木にとまってん。そこへ来合わせたのが東大寺のお坊さん義淵僧正やつた。義淵僧正は、子どもの泣き声が聞こえるので、「どこで泣いてんのやろう」とあたりを見回した。すると、杉の木の上に男の子がいたんや。義淵僧正は、びっくりして、子どもを助けてやった。子どもは、義淵僧正に養われ、大きくなって、良弁僧正という立派なお坊さんになつてん。良弁僧正は、二月堂の杉の木を父母と思うて、毎日行って拝んだそうや。それで、この杉の木を良弁杉と呼ぶようになったんて。
良弁僧正の母親は、子どもにめぐりあいたいと、三十年ものあいだ、諸国をめぐり歩いたんやて。ある時、母親は、淀川の舟の中で、旅人が「あの有名な良弁僧正というのは、赤ん坊の時に鷲にさらわれて、東大寺で助けられたお方らしいで」と話しているのを聞いた。母親は、すぐに奈良に行き、とうとう東大寺の杉の木の下で、我が子に会つてんて。

8 鬼子母神とザクロ



鬼子母神さんて、女の神さんや。人の肉を食べるのが好きで、人の子どもをさろうて来ては、食べはるわけや。あるとき、お釈迦さんが、それはいかんいうので、鬼子母神さんの、おおせいの子どもの中の一人を、隠さはつてん。鬼子母神さんは、血眼になって、自分の子ども探し回りはつた。お釈迦さんは、「お前は、子どもがそんなに大勢いても、一人でもなくなつたら、そのぐらい悲しむやろ。人間は数少ない子どもやのに、取られた親は、どのぐらい悲しんでるかわからんぞ。子どもをさるて、食べたりしやんと、事もうせい」といわはつた。鬼子母神さんは、「ああ、それもそうです」というて、自分の否を認めて、子どもをさらわんようにならはつたんやて。
お釈迦さんは、「食べたかったら、人間の肉とよう似たザクロを食べたらええ」というて、ザクロを渡さはつた。ほんで、ザクロの時期になつたら、鬼子母神さんの所に、ザクロいっばいお供えしてねんて。